

1 平成24年度河川工作物アドバイザー会議の開催状況

平成24年10月22日～24日 第一回会議開催（現地検討会）
 平成25年 1月31日 第二回会議開催（札幌市）

2 河川工作物の改良状況（平成24年度）

河川名	基数	事業内容	工事の状況
羅臼川	1基	スリットダム化	平成24年12月完成

※本工事をもって、河川工作物WGにおいて改良が適当と判断された13基全ての改良が終了。

3 遡上等モニタリングの状況

① 改良後の遡上等モニタリング（原則、改良後3ヵ年）

イワウベツ川及びチエンベツ川で実施。カラフトマスの来遊数が極端に少ない年であったが、サケ科魚類が改良済みダムの上流まで遡上し産卵していることを確認。

② 長期モニタリングに係る遡上等モニタリング

ルシャ川、テッパンベツ川及びルサ川で実施。調査魚種をカラフトマスとし、各河川の遡上数やルシャ川、テッパンベツ川での産卵床数の調査を実施。平成24年度は試験的調査として実施し、平成25年度からは本格的調査としてカラフトマスの豊漁年に合わせ隔年で実施予定。

4 河川工作物アドバイザー会議における主な論点

別紙のとおり

5 今後の予定

① 世界遺産委員会決議等を踏まえ、平成25年度より新たな遡上等モニタリング計画で実施する予定（別紙参照）。

② 今年度、改良が必要とされた5河川13基のダム改良の終了に伴い、改良したダムの評価等を行うため、河川工作物アドバイザー会議の委員によるワーキングチームを設置し、総括的な取りまとめを実施中。今年度中に最終取りまとめを行い、来年度には外部への情報発信を予定。

③ 改良が必要とされた5河川13基の改良の終了と総括的な取りまとめ踏まえ、グレー（改良に伴う防災機能等への全体的な影響が大きいことから現状維持）と評価されている河川工作物の取り扱いについて来年度より検討を開始。

平成24年度河川工作物アドバイザー会議における主な論点

1 世界遺産委員会決議に係る今後の対応

【知床に関する決議文（抜粋）】

「当該国に①サケ科魚類の移動と産卵の状況のモニタリングを継続するとともに、②サケ科魚類の移動と産卵を確保するために、ルシャ川において、必要に応じて、他の適切な手段を含む河川工作物のさらなる改良を行うことを検討するよう、さらに要請し、（中略）資産の保全状況を2015年の第39回世界遺産委員会で検討するために、世界遺産センターに2015年2月1日まで提出するよう、さらに要請する。」

- ① 決議文：「サケ科魚類の移動と産卵の状況のモニタリングを継続」に対して
○上記、決議内容を踏まえ、以下のとおりモニタリング計画を見直し。

【改良工事実施時期と新たなモニタリング調査計画】

河川名	H18 2006	H19 2007	H20 2008	H21 2009	H22 2010	H23 2011	H24 2012	H25 2013	H26 2014	H27 2015
イワウベツ川										
赤イ川	▲	←	★	▲	▲	→	→	◎		
ピリカベツ川		▲▲	←	→	→	→	→	◎	◎	
ルシャ川	●●	←	→					☆	◎	
サシルイ川		●●	←	→				◎	◎	
チエンベツ川			●	●	→	→	→	◎	◎	
羅臼川				●	→	→	→	←	←	→

- ▲：改良工事（北海道森林管理局） ★：改良工事（斜里町）
●：改良工事（北海道庁） ⇔：モニタリング期間
◎：新たな改良効果モニタリング ☆：長期モニタリング（遡上等）

- ② 決議文：「サケ科魚類の移動と産卵を確保するために、ルシャ川において、必要に応じて、他の適切な手段を含む河川工作物のさらなる改良を行うことを検討」
○上記、決議内容を踏まえ、以下のとおり整理。今後、地元漁業者や地元関係者との話し合い等調整を進めていくことを確認。

- ・ルシャ川の取り扱いについては、地元の現場（漁業者）の意見を訊くことが重要。
- ・時間をかけながら、地元等との話し合いを深めながら、将来のルシャ川のあり方について検討していくことが重要。

【参考】ルシャ川に係る委員の主な意見

- ・孵化場撤退に伴う稚魚放流停止により、シロザケやカラフトマスの回帰は減少することも考えられるが、これは自然の状態に戻ることであるので、世界自然遺産地域の核心地としては望ましい姿である。

- ・第1ダムの下流の副堤部分が河床低下している恐れがあり調査の必要がある。この部分は深い淵となっており、シロザケやカラフトマスにとってクマの捕食から回避できる等重要な淵である。ダムを撤去すればルシャ川で深い淵の一つがなくなる。
- ・ルシャ川の3つのダムがサケ科魚類の産卵遡上に影響（ダムが河道を固定し直線化させ、そのため産卵面積が限られ、産卵場所の流速が早すぎる結果となっていること。本来このような扇状地では河道が蛇行しあるいは枝分れし、サケ類の産卵場の面積を広く確保されるはずであるが、ここではダムがそれを阻んでいること。さらにダムが扇状地の端から端まで横断しており、地下深く設置されているため、本来扇状地であれば、伏流浸透水があちこちに出現し、そこがよいサケ類の産卵場になるが、ここではダムにより伏流水が遮断されてしまっていること。）を及ぼしていると考えられる。
- ・ルシャ川のダムの保全対象であった孵化場が平成24年度撤退した。これは、地元漁業者と時間をかけて調整した結果。今後、ダムをどうしていくかは、地元の皆さんとの合意形成を進めていくことが必要。

2 長期モニタリング

① 河川におけるサケ類の遡上数、産卵場所及び産卵床数モニタリング

- ・平成24年度は試験的調査と位置づけ、新たな遡上数の調査方法（河口に定点を設置し8時～16時まで2時間毎に20分間に定点を通過するカラフトマスの遡上・降下数をカウント）、産卵床調査箇所の確定と調査方法、ヒグマの調査への影響、過去の遡上数調査（ルサ川）との関連性を検証。
- ・モニタリング結果を踏まえ、委員よりルシャ川において遡上数に比べ産卵床数が少なすぎることから、今回使用した遡上数の昼夜比（過去の論文を参照）を再検討すること、ヒグマによる捕食（ルシャ川河口部で40～70頭の出没が確認）の影響も産卵床数減の要因の一つであることが考えられることとの助言あり。

② 淡水魚類の生息状況、特に知床の淡水魚類相を特徴付けるオショロコマの生息状況（外来種侵入状況調査を含む）

- ・調査対象河川として、遺産地域と遺産隣接地域を含め39河川を選定。
- ・調査内容として、生息数、物理環境の調査、その他淡水魚の生息状況、夏季の水温調査を予定。
- ・39河川から年8河川程度を抽出し、5ヵ年で一巡する継続的な調査を来年度より実施（水温調査については毎年度全ての河川で実施）。
- ・委員からは、夏季の水温調査は近年の最高気温の変動も考慮し7～9月とすること、外来種のニジマスが知床の一部の河川に生息していることから今後注視する必要があることとの助言あり。